比　較　文　化　論

No. 42

日本比較文化学会第 46 回全国大会
2024 年度国際学術大会
発表抄録

於　椙山女学園大学　星が丘キャンパス

2024 年 5 月 18 日（土）

日本比較文化学会

The Japan Association of Comparative Culture

〈海外提携学会〉
韓国日本文化学会
台湾日本語文学会
淡江大学村上春樹研究センター
台湾日本語教育学会
台湾応用日本語学会

日本比較文化学会第 46 回全国大会・2024 年度国際学術大会

理事会
日時：2024 年 5 月 17 日（金）
17:00～　イオンコンパス名古屋駅前会議室
愛知県名古屋市中村区椿町 18-22
ロータスビル 5 階
http://www.aeoncompass-kaigishitsu.com/nagoya/

日本比較文化学会第 46 回全国大会・2024 年度国際学術大会プログラム

会場：椙山女学園大学 星が丘キャンパス（名古屋市千種区星が丘元町 17-3）
スケジュール：
5 月 18 日（土）

8:40	受付開始
9:00～10:00	総会及び理事会（情報社会学部メディア棟 001 教室）
10:10～11:00	基調講演（情報社会学部メディア棟 001 教室）
11:10～12:30	シンポジウム（情報社会学部メディア棟 001 教室） テーマ：「比較文化学と情報社会:AI 時代の到来を踏まえて」
13:50～17:00	研究発表（情報社会学部、外国語学部各教室）
17:15～17:30	閉会式（情報社会学部メディア棟 001 教室）

18:00～　懇親会
会場　トド アリトル ナレッジ ストア
（TT” a Little Knowledge Store）
名古屋市千種区星が丘元町１６－５０ 星が丘テラス EAST4F
電話番号： 052-753-5147

研究発表者、司会の皆様へ

・研究発表の時間は、発表、質疑応答、交代時間を含め 1 人 30 分以内です。
・各教室には Windows の PC が設置されています。ご自身の PC を御使用の場合、機器接続などはご自身で対処していただきますようお願いいたします。Mac を使用される場合は、接続用アダプターを各自でご用意ください。
・会場設置 PC ではインターネットもご利用いただけます。学内では eduroam も御使用いただけますが、機器との相性などもありますので、接続につきましては自己管理でお願いいたします。
・資料を配布される場合、20 部程度をご自身でご用意ください。

地図・アクセス

5 月 17 日（金）　理事会・編集委員会：
17:00～　イオンコンパス名古屋駅前会議室
愛知県名古屋市中村区椿町 18-22　ロータスビル 5 階
http://www.aeoncompass-kaigishitsu.com/nagoya/

5 月 18 日（土）　日本比較文化学会第 46 回全国大会・2024 年度国際学術大会
椙山女学園大学 星が丘キャンパス（名古屋市千種区星が丘元町 17-3）
名古屋市営地下鉄東山線「星ヶ丘」下車 【6 番出口】より徒歩 5 分
★正門から入構してまっすぐ進み、突き当りの右の建物がメディア棟（会場・受付）です。

基調講演

10:10～11:00　情報社会学部メディア棟 001 教室

講演者：向 直人 先生（椙山女学園大学情報社会学部 教授）

演題：ChatGPT のペルソナを利用した比較文化の可能性と課題

シンポジウム

11:00～12:20　情報社会学部メディア棟 001 教室

テーマ：「比較文化学と情報社会:AI 時代の到来を踏まえて」

司会：津村公博（浜松学院大学教授）

パネリスト：

1. 大谷鉄平（北陸大学講師）
   日本での震災「情報」を、留学生はどう捉えるか
2. 田島喜代美（常葉大学非常勤講師）
   COLP（Collaborative Online Learning Program）を活用した海外にルーツがある児童・生徒への母語・母文化支援―AI の視点からの考察―
3. 曾秋桂（台湾淡江大学教授／台湾日本語教育学会理事長・台湾日本語文学会理事）
   生成 AI 時代の DX 推進に必要なマインド・スタンスとスキル―AI 時代にこそ比較文化学が必要とされることを立証する―
4. 長谷川千春（至学館大学助教）
   騎士道と武士道の混在と錯綜―対戦格闘ゲーム『サムライスピリッツ』における文化の創造・商品化・人間の AI 化―

研究発表

第 1 会場　情報社会学部メディア棟 127 教室

第 1 部 13:50-15:20　司会：山内信幸（同志社大学教授）

王子涵（同志社大学大学院博士後期課程）・山内信幸（同志社大学教授）
『吶喊』の日本語翻訳本における多様性の研究

祁雅麗（同志社大学大学院博士前期課程）・山内信幸（同志社大学教授）
中国人日本語学習者における同時進行を表す「ナガラ」の習得に関する一考察

代書芸（同志社大学大学院博士前期課程）・山内信幸（同志社大学教授）
日本人母語話者における省略表現と日本語教育への示唆―ソーシャルメディアの会話を例に―

第 2 部 15:30-17:00　司会：山内信幸（同志社大学教授）

佐古恵里香（流通科学大学特任講師）・山内信幸（同志社大学教授）
第 2 言語習得研究におけるインタープロトタイプの意味づけに関する一考察―視覚イメージにおける共通特徴分析を用いて―

柳燁佳（同志社大学外国人留学生助手（有期））・山内信幸（同志社大学）
　個人文体は経年変化するのか？―初期作品と直近作品の文体比較を通じて―
山本茉莉（びわこ学院大学非常勤講師・同志社大学大学院博士後期課程）・山内信幸（同志社大学教授）
　「状況（環境）」を提示する「特別用法」の *it* と共起動詞の時間特性

第 2 会場　情報社会学部メディア棟 128 教室

第 1 部 13:50-15:20　司会：中村友紀（関東学院大学教授）

武富利亜（近畿大学教授）
　小説に描かれる人間とロボット―アイザック・アシモフ、デボラ・インストール、カズオ・イシグロの小説からの考察―
耿義（宇都宮大学大学院博士後期課程）
　莫言の作品における「魔術的な抵抗」と「真実な歴史」―『赤い高粱一族』『白檀の刑』を手掛かりに―
中野優子（東北学院大学助教）
　夏目漱石のアンドロイドをめぐって―死生観を中心に―

第 2 部 15:30-17:00　司会：八尋春海（西南学院大学教授）

枦山剛（国立鳥羽商船高等専門学校教授）
　太平洋戦争勃発前後における重光葵の政治外交政策―生い立ちから巣鴨プリズン出所後まで―
欒暁涵(関西大学大学院博士後期課程)
　小畑薫良の李白詩英訳と 20 世紀中国海外留学生との関係
曾秋桂（台湾淡江大学教授）
　AI 技術との協働を補助線に行う村上春樹文学の死生観研究の体系化―『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』における死生の描写―

第 3 会場　外国語学部棟 010 教室

第 1 部 13:50-15:20　司会：林裕二（西南学院大学教授）

岩松文代（北九州市立大学教授）
　西洋における竹の認識の成り立ち―葦と竹の形態・名称・用途の関連性を中心に―
矢島真澄美（東北学院大学特任准教授）
　イタリア系英国人写真家フェリーチェ・ベアトによる景観の表現
Malgorzata Dutka（大阪大学研究生）
　「アート」から「道」へ―Alfred Koehn の著作にみるいけばな表象の展開―

第 2 部 15:30-17:00　司会：那須野絢子（常葉大学講師）

横地徳広（弘前大学准教授）
　苦海は浄土か？―杢太郎と智子のあいだで―
呂政慧（名古屋大学大学院博士後期課程）

清末中国の唱歌遊戯作品からみる明治日本の遊戯唱歌の受容
符旖恩（広島大学大学院博士後期課程）
「満洲国」の中国人小学生向けの日本語教科書におけるプロパガンダ

第 4 会場　情報社会学部メディア棟 325 教室

第 1 部 13:50-15:20　司会：白鳥絢也（常葉大学准教授）

郭潔蓉（東京未来大学教授）
多文化共創社会の実現を目指すパブリック・マネジメント―新宿区の取り組みから―
田中真奈美（東京未来大学教授）
被支援者から支援者へ―外国ルーツの人々のコミュニティでの活躍―
白鳥絢也（常葉大学准教授）
わが国の教育課程の変遷を見つめる―特に「昭和」の学習指導要領に注目して―

第 2 部 15:30-17:00　司会：水町いおり（中京大学嘱託講師）

森下一成（東京未来大学教授）
沖縄固有信仰における祭祀施設の統合について
李江龍（愛知県立大学大学院 博士後期課程）
「妖怪ツーリズム」とは何か―その意味と研究の流れをめぐる考察―
大崎洋（愛知大学綜合郷土研究所研究員）
「カラオケ喫茶のママ」にみる幸福論―私の幸せは此処に―

第 5 会場　情報社会学部メディア棟 240 教室

第 1 部 13:50-15:20　司会：北林利治（京都橘大学教授）

松家鮎美（岐阜薬科大学准教授）
大学授業における英語プレゼンテーション―探究的実践の試み―
橋尾晋平（名古屋外国語大学専任講師）
日本人中級英語学習者の学習者言語に関する一考察―二重主語文に関する和文英訳テストを資料として―
松井夏津紀（京都先端科学大学准教授）
アニメに出現する命令・依頼表現に対する英語・フランス語翻訳

第 2 部 15:30-17:00　司会：澤田敬人（静岡県立大学教授）　※オンライン

石俊彦（東北大学大学院博士後期課程）
「韓劇」および「韓流ドラマ」―テレビドラマ領域における日中での初期の韓流受容概念の比較研究―
龐朝霞（奈良女子大学大学院博士後期課程）
なぜ中国においてコミュニティ単位の災害対応が期待しにくいのか
Petra Maveekumbura Karlova(Assistant Professor(助教), Palacky University Olomouc)
Theravada Buddhist Ethics in Sri Lankan Karate Practitioners' Life and Practice

基調講演
10:10～11:00　情報社会学部メディア棟 001 教室

ChatGPT のペルソナを利用した比較文化の可能性と課題
向直人（椙山女学園大学情報社会学部教授）

この基調講演では、異文化間の理解を深めるための新しい手法として、ChatGPT のペルソナ機能の活用を提案します。具体的には、「食事」や「習慣」などの異文化間の対話シナリオを例に挙げ、ChatGPT を通じた文化比較の教育的可能性とその効果を検討します。一方で、AI によるシミュレーションの限界にも言及し、異文化理解のためには実際の体験や人間同士の交流の必要性に関して議論します。この講演は、テクノロジーを活用しつつも、人間的な理解と感情の深さを重視する比較文化研究の新たな方向性を示唆します。

シンポジウム「比較文化学と情報社会:AI 時代の到来を踏まえて」
11:00～12:20　情報社会学部メディア棟 001 教室

日本での震災「情報」を、留学生はどう捉えるか

大谷鉄平（北陸大学講師）

2024 年 1 月 1 日、石川県能登半島を中心に震度 7[1]の地震、ならびに津波が発生し、甚大な被害をもたらしている（以下、「能登半島地震」）。一方、高度に情報化が発展した現代においては、（地震に特化すれば）東日本大震災（2011 年発生）、熊本地震（2016 年発生）の際も、リアルタイムに現地の情報が発信されてきたが、①中にはいわゆる「フェイクニュース」を SNS で拡散する者も少なくない。特に、生成 AI が普及し、個人が偽画像・動画を投稿し、社会を混乱させる実態[2]もある。また、留学生にとっては、②自国でのメディアの報道と日本でのメディアでの報道との間に差がある（名嶋（2017）参照）、との点で不安を招きかねない。

本発表では、「メディアとことば」の観点より、留学生（中国（本土））が今回の能登半島地震を経、上掲①、②についてどのような情報を得、そしてどう考えたか、についての率直な意見を収集したうえで考察することで、いわゆる「Z 世代」にあたる留学生の意識や行動における震災情報との「向かいかた」について、結果を踏まえた見解を報告したい。また、発表者は毎年、3 年次ゼミ[3]において、名嶋（2017）を教科書とし、批判的（critical）な思考力ならびにメディアリテラシーの育成、そしてそれを踏まえた実践を行っている。これを踏まえ、同様に①、②を焦点とした調査結果を報告する。

なお、調査方法としては、勤務校に 3 年次編入をした留学生（3、4 年生）を対象に（1）自国（＝中国）の SNS 上での能登半島地震関連の情報のうち、気になったもの、（2）自国（＝中国）メディアでの能登半島地震関連の情報のうち、気になったもの、を自由に報告してもらうアンケートを Google Form を用いて実施した。また、日本国内での情報については、発災直後から相次ぐ SNS・メディア上でのデマの事例を紹介したうえで、震災に関する報道についてとともに聞き取りを行った。

日本語教育に従事する者にとって、「災害と外国人」との観点からは「やさしい日本語」に関する検討が重要であることは言うを俟たない。その一方、現代においては、誰しもが容易に情報を入手・拡散できることもあり、留学生に対するメディアリテラシー教育の在り方についても、検討の余地があるのではないかと考える。

【参考文献】

名嶋義直（編、2017）『メディアのことばを読み解く 7 つのこころみ』、ひつじ書房

---

[1] 16:10 発生（気象庁 https://www.jma.go.jp/jma/menu/20240101_noto_jishin.html ）

[2] 東洋経済オンライン記事「災害時の SNS「デマ・誤情報」惑わされない対策 6 つ」参照（https://toyokeizai.net/articles/-/725943 ）。2024 年 1 月 7 日閲覧。

[3] 現状、発表者のゼミは、毎年、全員、留学生のみで構成されている。

シンポジウム「比較文化学と情報社会:AI 時代の到来を踏まえて」
11:00～12:20　情報社会学部メディア棟 001 教室

COLP（Collaborative Online Learning Program）を活用した
海外にルーツがある児童・生徒への母語・母文化支援
―AI の視点からの考察―

田島喜代美（常葉大学非常勤講師）

本研究は、海外にルーツがある児童生徒における、「受け入れ国」と「送り出し国」が連携した教育プログラムの構築のなかから、AI を活用した協働学習の事例を報告する。

海外にルーツがある児童生徒においては、移住先での文化的適応や言語習得の過程で、自らの母語・母文化を失うリスクがあることは重要な課題である。彼らが自己のアイデンティティを維持し、心理的健康や社会的適応を促進する機会を提供することにより、母語・母文化を保持できる児童生徒は、日本語の習得にもつながり学力の定着にもつながると考えられる。

COLP（COLP ： Collaborative Online Learning Program（以下「COLP」という。）は、「受け入れ地域」である浜松市と、「送り出し地域」であるフィリピン共和国・ダバオ市の公立学校が連携した、海外協働学習オンラインプログラムとして、海外につながる児童生徒の学力維持、さらなる進学、そして将来のグローバルリーダーとしての育成を目的として開発した。COLP は、学習管理システムによりカリキュラムの管理や学習進捗の追跡を可能にし、また学習コミュニティシステムでは、学習者同士のコミュニケーションや協働学習を促進している。これらの機能を通して集められたデータは、AI による自動評価や言語分析ツールの利用、参加者の言語習得や文化的適応の変化を定量的・定性的に評価することが可能となる。また教材づくりにおいては、AI の活用することで学習者のニーズや興味に合わせた教材を効果的に作成することができる。さらに、チャットボットを活用した学習者支援システムの設計や実装方法についても試験を行っている。

グローバル化による子どもの国際移動が増える中、COLP による協働学習は、移住した児童生徒だけでなく、送り出し国の児童生徒の学習にも大きな効果を与えている。彼らは出生地と関係が深い地域である日本の文化・言語に触れることで、移住先や移住先の児童生徒への関心および理解を深めている。

今後 AI の発達により、COLP のようなオンライン海外協働学習のニーズはさらに高まるであろう。個別学習のカスタマイズやコミュニケーションの促進には、技術的な課題もまだまだ存在する。AI 技術の進歩により、効率的で個別に適した教育プログラムが提供され、海外につながる児童生徒の学習体験のさらなる向上が期待される。

シンポジウム「比較文化学と情報社会:AI 時代の到来を踏まえて」
11:00～12:20　情報社会学部メディア棟 001 教室

生成 AI 時代の DX 推進に必要なマインド・スタンスとスキル
―AI 時代にこそ比較文化学が必要とされることを立証する―
曾秋桂(台湾日本語教育学会理事長・台湾日本語文学会理事)

機会あり、普通のバスと違った系統の K 大学病院の巡回バスに乗っている時に見た風景であった。シーカーを持って乗ろうとした外国人に、日本人の運転手が「NO、キャッシュ」と大きな声で言った。緊急時に限られた単語を咄嗟の間に口に出してコンミュニケーションを図ることは無理はないが、その冷たい印象がどうしても払拭しきれない。また、H 市の市営バス案内所で空港までのバスチケットを買おうとした時に、マニュアル通りの応答が突き放された。サビース業のはずだが、応答が何故か冷たく感じられる。私の知っている思いやりのある古きよき日本がどこへ消えてしまったか。このように、今時代に人間と応答して感じられる冷たさが、正に AI に抵抗している人間が「AI が人間のような温かみはなく冷たい」と言うこととは大差はなかろう。実は、音声機能を搭載する Google アシスタントに「OK Google」と対話すれば、遥かに上品で、思いやりのある応答が返してくれている。マニュアル化し、人間味を失いつつある人間と、進化し人間味の持ちつつある AI との対比が皮肉的である。

例えば、2022 年 11 月に ChatGPT-3.5、2023 年 3 月に ChatGPT-4 し、さらに 2024 年 3 月に ChatGPT-4 を超えた最新版の最強な Claude3 がリリースされた。と共に画像生成 AI「DALL-E（ダリ)」技術の開発が進んでいる。人物や背景などを文章で指示すると、「夜の東京を歩く女性」や「雪原を歩くマンモス」のような、最長 1 分の動画を作れる革新的な AI モデル「Sora（ソラ)」が 2024 年 2 月に発表されたという。このように、生成 AI が強大な性能を持ち、人間が従事している多種多様な職業を奪いつつ、全世界をして戦慄せしめているものの、生成 AI 時代の DX 推進に必要なマインド・スタンスとスキルの学習を考えなくてはならない時期に来ている。特に外国語人文系でも無難に身に付けられる AI リテラシーと AI 応用力がその鍵を握っているように思えてならない。

それは ChatGPT とメタバースを「日文習作(二)」(3 年生、必修科目、2 単位)授業に導入して実践してから言えたことである。本稿では、履修生が会得した生成 AI 時代の DX 推進に必要なマインド・スタンスとスキル、PowerPoint でのリアルタイムの自動キャプションまたは字幕の表示、AI ソリューションの事例などを引き合いに、AI 時代こそ比較文化学が必要とされることを立証しようとするのである。

シンポジウム「比較文化学と情報社会:AI 時代の到来を踏まえて」
11:00～12:20　情報社会学部メディア棟 001 教室

騎士道と武士道の混在と錯綜
―対戦格闘ゲーム『サムライスピリッツ』における文化の創造・商品化・人間の AI 化―
長谷川千春（至学館大学助教）

本発表では、対戦型ゲームの中でも特に『サムライスピリッツ』(SAMURAISPIRITS、SNK、1993-2019 年）に着目し、現代のデジタル及び人口知能的技術を通して表現される騎士道と武士道、及びそれらがゲームの中でどのように消費されているかを分析する。

対戦格闘ゲームは 1980 年代後半から 90 年代にかけて複数登場し、大衆文化に影響を与えた。たとえば『ストリートファイターII』や『ワールドヒーローズ』では、国境、地理、言語、文化、国境の枠組みを超えた世界を舞台に戦いが繰り広げられる。『サムライスピリッツ』では日本の武士に加え、アメリカ出身の忍者、フランスの貴族出身の女剣士、清帝国の武将も加わり、日本が中心の舞台で世界の戦士と戦うことが特徴の一つである。オンライン技術が未発達だった日本のゲーム利用者にとって、対戦格闘ゲームは人や物の移動が自由なグローバル化された世界での戦いを疑似体験できるツールであったともいえる。

しかしながら、ゲームは本質的に利益を求める民間企業が制作する商品である。従って顧客獲得のための戦略的マーケティングはもちろん、ゲーム利用者が面白く感じ続ける工夫が求められる。ゲーム設計や演出を用いて、とある国の文化を誇張し過ぎることで誤解を生む可能性も生じる。

さらに対戦格闘ゲームでは勝負に勝つことも重要である。昨今、制限時間内に効率的に相手の体力を減らすことを争う e スポーツとして競技化もされ始めた。技術の差や操作ミスによって連続技を受け、時には一方的に殴られる（斬られる）だけで戦いが終了することもある。ゲーム参加者は選んだ人物の特徴を活かし、機器操作の無駄を排除した最適解の動きと判断力で勝つことを目的とする。いかに効率的に殴りあうか、殺し合うかが競われているのである。

とすると、騎士道や武士道は商品としてのゲームを装飾するための表面的な要素とならざるを得ない。確かにゲーム参加者は登場人物を動かしている。しかしその参加者は、操作する人物の動きを練習という過程で自身にプログラムし、それを人工知能的に学習し、作業を繰り返す。ゲームを媒体として人間が AI 化しているとも言える。

騎士道及び武士道は過去のものであるが確かに現代に存在している。ただ、これらは時代によって利用され、創造され、装飾され、商品化され、意図的に社会に埋め込まれたとも考えられる。『サムライスピリッツ』も対戦ゲームとして大衆文化に刻み込まれた文化の一形態とも言えるだろう。このように AI 時代に娯楽や競技イベントとして大量消費され変容していく文化表象を深く理解するために、比較文化学的視点の重要さを示したい。

研究発表
第 1 会場　情報社会学部メディア棟 127 教室
第 1 部 13:50–15:20　司会：山内信幸（同志社大学教授）

『吶喊』の日本語翻訳本における多様性の研究

王子涵（同志社大学大学院博士後期課程）・山内信幸（同志社大学教授）

中国現代文学を代表する魯迅が小説執筆を始めたのは、37 歳のことであった。魯迅の小説は、長年にわたって、彼が世界に対して持っていた深い思索と関連があると考えられている。魯迅（1985: 447）によれば、創作活動において、「有真意，去粉饰，少做作，勿卖弄『竹内訳：真意があり、粉飾を去り、作為のあることをせず、ひけらかさない』」の主旨が内包している。言い換えれば、魯迅は、創作の過程で、言葉の選択に非常に注意し、常に最も簡潔で、最も適切な言葉で、豊かな意味を表現しようとしている。

魯迅の小説集『吶喊』は、日本で幅広く翻訳されていて、翻訳者の主体性と翻訳の多様性の相関を垣間見ることができる。翻訳者は、まず、1 読者として、原文と「対話」し、その後、翻訳文を通じて、翻訳テキストを媒介して読者と「対話」する。翻訳者は異なる経験から異なる視点で翻訳するので、都築（2019：3）が指摘したように、「言語における表現形式の偏りくせの多くは、事態把握の傾向の違いに帰することができる。」と考えられる。ある翻訳者は翻訳文を目標言語文化に近づける傾向がある一方、他の翻訳者は原文の言語文化に近づける傾向がある。そのため、文学翻訳において、同一の原文に対して複数の異なる翻訳が存在する現象は普遍的なものと見なすことができる。異なる翻訳者が異なる選択をすることがよくあり、Oustinoff（2008：20）によれば、「翻訳があらゆる変容を引き起こしてしまう事実を非難できない。」ことになり、また、王（2005：17）によれば、翻訳は、「「現実―認知―言語」というパラダイムで、現実の体験を背景にした認知主体が多重な相互作用に基づく認知活動である。」と指摘している。

本発表では、翻訳の多様性が存在する事実自体が、どのような翻訳方略も完全体ではないことを指摘し、これは、翻訳方略の選択は常に動態的に変化しており、従前の訳本と異なる翻訳方略と理解によって、新たな訳本が生み出され、1 つの作品として読者に提示された時点で、独立したものとして読者に受容されていくプロセスと捉え、翻訳プロセスを翻訳の多様性として再構築する必要があると主張する。

参考文献

Oustinoff, M.（2008）『翻訳 その歴史・理論・展望 文庫クセジュ』（服部雄一郎訳）東京：白水社.

魯迅.（1985）『魯迅全集 6　二心集・南腔北調集』（相浦杲〔ほか〕編，竹内実〔ほか〕訳）. 東京：学習研究社.

都築雅子.（2019）「事態把握の主観性と言語表現―認知言語学の知見より」『語りの言語学的/文学的分析―内の視点と外の視点』（郡伸哉・都築雅子編集）東京：ひつじ書房.

王寅.（2005）「認知語言学的翻訳観」『中国翻訳』(05), 15-20.

研究発表
第 1 会場　情報社会学部メディア棟 127 教室
第 1 部 13:50-15:20　司会：山内信幸（同志社大学教授）

中国人日本語学習者における同時進行を表す「ナガラ」の習得に関する一考察

祁雅麗（同志社大学大学院博士前期課程）・山内信幸（同志社大学教授）

国立国語研究所（1951: 128）によれば、同時進行を表す「ナガラ」は、「ある動作・作用が継続されると同時に、他の動作・作用が並行して行われる事態における両動作を接続する」と定義されている。この表現は、中国人学習者向けの教科書では、中国語の「一边～一边～」と対応させることが多い。

建石（2007）では、中国人日本語学習者 30 人による同時進行を表す「ナガラ」の使用状況を分析し、誤用がほとんど見られないことが報告されている。その原因は、中国語にも「ナガラ」とよく似た「一边～一边～」の形式があり、母語のプラスの転移が生じている可能性があると推測している。しかしながら、われわれは、村上春樹の『村上春樹全作品 1979−1989 ⑥ ノルウェイの森』と東野圭吾の『放課後』とともに、その中国語訳本をサンプルにして分析した結果、「ナガラ」構文と中国語の対応表現が 7 種類存在していることを確認し、それが中国人日本語学習者に異なる影響を与えていると推測している。

本発表では、同時進行を表す「ナガラ」と中国語の各対応関係において、「ナガラ」の前に接続する品詞と調査対象者である中国人学習者の母語の影響を考察し、同時進行を表す「ナガラ」の習得状況を検討することを目的としている。

具体的には、BCCWJ（現代日本語書き言葉均衡コーパス）を用いて、日本語母語話者における「ナガラ」の使用実態を明らかにし、同時進行を表す「ナガラ」を 200 例ほど抽出する。さらに、5 名の上級中国人日本語学習者（日本滞在時間 5 年以上・日本語学/日本語教育学/中国語学専攻）の協力のもと、選ばれた「ナガラ」構文と中国語の対応関係の適否を判断してもらうことによって、それぞれの日中語の対応関係とその特徴を明確にする。

次に、中国在住の中上級中国人日本語学習者 150 名（N1・N2・N3 レベル各 50 名）を対象に、各対応関係において、代表例文を合計 50 例抽出し、アンケートによる「◯×式正誤判断テスト」と「対訳テスト」を通じて習得状況を調査する。

本発表は、同時進行を表す「ナガラ」構文と中国語の対応表現を比較し、先行研究で検討されていない対応関係を明らかにする。それらの対応関係が中国人日本語学習者に与える影響を考察することを通して、学習者の抱える習得困難状況の原因も分析する。

参考文献

国立国語研究所. （1951）『現代日本語の助詞・助動詞―用法と実例』東京：秀英出版.
建石始. （2007）「中国語母語話者の同時を表す接続助詞の習得について：ながら・つつ・がてら・を中心に」『神戸大学留学生センター紀要』13，pp.103-115.

研究発表
第 1 会場　情報社会学部メディア棟 127 教室
第 1 部 13:50-15:20　司会：山内信幸（同志社大学教授）

日本人母語話者における省略表現と日本語教育への示唆
―ソーシャルメディアの会話を例に―

代書芸（同志社大学大学院博士前期課程）・山内信幸（同志社大学教授）

世界中の数多くの言語の中で、日本語は省略表現が非常に顕著に使用される言語と位置づけられる。日本語でよく見られる省略表現は、「場」を重視する「高コンテキスト」なコミュニケーションと見なすことができるが、日本の言語文化に不慣れな中国人などの外国人には、省略表現の理解は極めて難しく、時には誤解を招くこともある。特に、近年、IT 技術の急速な発展に伴い、日常の言語生活におけるソーシャルメディアでは、日本人母語話者の省略の使用がしばしば観察される。応用言語学的には、一般的な書き言葉より、日常生活に溶け込んだ SNS における日本語を対象とすることによって、母語話者の身近な日本語使用における利用実態とその言語的な特徴を観察することができる。特に、日常の対面会話ではなく、SNS における日本語母語話者の会話分析から、日本語に特有な特徴が明らかになるという学術的意義がある一方で、さらに、日本語教育で従来の「文法中心」の教授理念から「応用中心」の実践的なモデルへと転換し、外国人日本語学習者の語学力の向上につながるという社会的意義もある。

本発表では、ソーシャルメディアにおける日本人母語話者の省略表現に焦点を当て、その特徴を分析し、日本語学習者に対して、効果的な学習方法を提案することを目的とする。具体的には、日本人母語話者がよく使う LINE での会話データを収集し、日本人母語話者の省略表現の運用実態を明らかにする。その際には、文中の省略と文末の省略に分け、さらに、文中の省略を主語・主題の省略、格助詞の省略に、文末の省略を述語省略と言いさし文に分けて、詳しく分析・考察する。

分析を通して、ソーシャルメディアにおいても日本語母語話者の省略表現がよく観察されることが導かれる。特に、文中の省略において、格助詞の省略が一番多く用いられることがわかる。また、主語・主題の省略、述語の省略なども文脈に応じて、頻繁に行われていることもわかる。省略は、実際の日本語教育場面ではとりわけ重要視されていない表現項目なので、今後の日本語教育では、日本語学習者が省略をより理解し、より適切に運用することが求められる。教育現場で使われる日本語教材の内容に鑑み、従来の文法・語彙偏在を反映した硬い表現や日本語学習者が普段ほとんど使用しない場面の表現よりも、生活場面、例えば、日常の家庭内での会話や SNS 会話でよく使われる省略などを含む内容で教材を構成することによって、会話文も生活場面で使われる「生きた」実用的な日本語を教授し、運用させる必要がある。さらに、日本語に加えて、多文化共生や異文化コミュニケーションといった社会的・文化的な内容や知識を日本語授業の内容として取り入れることも期待される。

研究発表
第 1 会場　情報社会学部メディア棟 127 教室
第 2 部 15:30-17:00　司会：山内信幸（同志社大学教授）

第 2 言語習得研究におけるインタープロトタイプの意味づけに関する一考察
―視覚イメージにおける共通特徴分析を用いて―

佐古恵里香（流通科学大学特任講師）・山内信幸（同志社大学教授）

筆者らは、これまでに、中間言語における視覚イメージの役割を検討し、これらを一つの言語複合体構造として捉えることで、言語（テキスト、文、語）と視覚イメージの対応関係を明らかにしようと試みてきた。同時に、小説、民話、ことわざ、詩などの異なるジャンルの読み物の調査・研究を通じて、第 2 言語習得研究における中間言語の体系が段階的に構築している証左を示してきた。本発表においては、これらの異なるジャンルにおける共通特徴を分析して、抽出されたインタープロトタイプ（中間的に形成された母語でも目標言語でもない学習者独自のイメージ）に認知的な意味づけをすることの妥当性を立証していくことを目的としている。

具体的には、まず、学習者に異なるジャンルの読み物を読ませて、イラストと読み物の要約を描かせた。次に、日本語母語話者にこれらのイラストが日本文化として受け入れられるかについて、6 段階評価をさせた。各イラストの平均評価点から、連続型分布データのヒストグラムを作成して、目標言語と目標文化の浸透性を分析（目標言語と目標文化浸透度分析）した。分析の結果、各ジャンルの（小説、民話、ことわざ）評価平均値における *t* 検定に差は見られず、読み物のジャンルが異なっていても、学習者の文化浸透性の分布には、共通性が担保されることが示された。得られた結果から、中上級日本語学習者における日本語・日本文化の浸透性におけるエラーパターンには、共通性がありうると判断して、現出した区間内におけるインタープロトタイプを分類して、認知的な意味づけ与えた。それらは連続体分布データであることから、各範囲は、連続性を伴う段階性（範囲）と言える。

本発表の新規性として、第 1 に、Hatch（1983）の Unified Model を援用することで、中間言語は、学習者の社会的知識や認知的知識や言語知識のレベルに応じて変化する段階的な連続体として考えられうることを主張した。第 2 に、第 2 言語の習得が進むにつれて、視覚イメージも、言語項目（語、文法項目、発話行為など）が目標言語に近づくのと同じように、習得が進んでいることを指摘した。さらに、これらの実証的知見は、理論的含意を補強する役割を果たしうる。最後に、言語と視覚イメージの複合体構造の共通特徴を分析することで、これまでブラックボックスとされてきた第 2 言語習得における中間言語の連続体の段階性に関する認知的な意味づけの妥当性を主張した。

参考文献

佐古恵里香・山内信幸.（2023）「中上級日本語学習者における中間言語の段階性に関する一考察―言語と視覚イメージを組み合わせた包括的アプローチの提案―」『台灣應用日語研究』第 32 期, pp.51-76.

研究発表
第 1 会場　情報社会学部メディア棟 127 教室
第 2 部 15:30–17:00　司会：山内信幸（同志社大学教授）

「状況（環境）」を提示する「特別用法」の *it* と共起動詞の時間特性

山本茉莉（びわこ学院大学非常勤講師・同志社大学大学院博士後期課程）・
山内信幸（同志社大学教授）

従来の英文法では、「時間」や「天候」などを表す際に用いられる *it* は、意味や指示機能を持たない「虚辞」と考えられてきた。一方で、山本・山内（2023a）は、小説のチャプター冒頭文において、*it* とともに、後の述部で「状況（環境）」が提示された場合、後続文脈において当該の「状況（環境）」を表す反復表現や類義表現が再掲されることを確認し、談話冒頭の「『状況（環境）』の *it*」がもつ「舞台設定装置」の効果は一定の文脈に亘って持続し、後方照応的指示機能を有することを指摘している。また、山本・山内（2023b）は、*it* とともに、後の述部で「状況（環境）」が提示された用例（*it* データ群）は、*it* を伴わず「状況（環境）」が提示された用例（その他データ群）と比べ、「状況（環境）」持続率が相対的に高くなる傾向にあることを指摘している。本発表では、著者らの従来の主張点を補強する 1 つの根拠として、山本・山内（2023b）では未検証の各データ群に用いられた動詞のアスペクト特性に着目する。

出水（2023b）によると、持続的な時間特性を有する動詞の場合、その動作の最中の様態が細かく描写できると述べている。この考察から、「状況（環境）」表現と共起する動詞の時間特性は、山本・山内（2023b）が考案した「『状況（環境）』持続率」と関連しうると考える。そこで、本調査では、主語位置の *it* が「状況（環境）」を提示する *it* データ群は、*it* を伴わず「状況（環境）」を提示するその他データ群の用例と比べ、持続性をもつ動詞と共起すると仮説を立てて、検証を試みる。また、同じ時間特性を有する動詞であっても、*it* データ群とその他データ群の間には、「状況（環境）」持続率に有意差が生じる仮説を立てて、検証を試みる。調査対象は、複数の小説から収集した「状況（環境）」表現の用例で、出水（2023a, 2023b）の動詞の時間特性と事象構造の枠組みを参照し、共起する動詞の時間特性を「持続的」と「瞬間的」に分類する。

本調査により、文脈に依存すると考えられていた「状況（環境）」表現の時間特性を解釈する手掛かりを *it* の有無の側面から導き出せると主張する。また、同じ時間特性を有する動詞を伴うとしても、*it* データ群が高い「『状況（環境）』持続率」を維持することを示せば、「『状況（環境）』の *it*」の談話機能が明示できると主張する。

参考文献

山本茉莉・山内信幸.(2023a).「いわゆる『it の特別用法』をめぐる再考察―4 つの状況カテゴリーに着目して―」『比較文化研究』151, 39-49.
山本茉莉・山内信幸.(2023b).「英語の「特別用法」の it をめぐって―日本語の指示表現との関連から―」『英語語法文法学会第 31 回大会予稿集』44-50.
出水孝典.(2023a).「語彙アスペクトと事象構造（上）時間特性を診る 14 章」東京：開拓社.
出水孝典.(2023b).「語彙アスペクトと事象構造（下）事象の枠を捉える 14 章」東京：開拓社

研究発表
第 1 会場　情報社会学部メディア棟 127 教室
第 2 部 15:30–17:00　司会：山内信幸（同志社大学教授）

個人文体は経年変化するのか？
―初期作品と直近作品の文体比較を通じて―

柳燁佳（同志社大学外国人留学生助手（有期））・山内信幸（同志社大学）

近年、文章を成立させる多数の要素の量化を通じて、主観性が強いとされる文体を互いに比較可能にできるという計量文献学の視座から、著者の個人文体が生涯を通して変化するか否かついての研究が散見されるようにはなってきた。一方で、各々が選んだ作品の量・質や切り取った発表時期の幅に一貫性がないせいか、導かれる結論には異同が見られる。

日本語を対象とした研究として、22 名の心理学研究者の計 88 編の査読付き学術論文（単著）を対象とした財津・金（2019）による比較研究を挙げられる。しかし、この研究は、対象 1 人につきサンプル数が 4 つしか用いられていないうえ、学術論文というジャンルの性質上、創作の自由度が大きく制限されるため、個人文体が恒常的であるという彼らの主張には説得力を欠くように思われる。

本発表では、分析対象とすべき文章のジャンルを見直したうえで、時間的間隔もなるべく幅を持たせるようにした。具体的には、5 人の日本人小説家のデビュー期と直近 3 年間（令和 3 年から 5 年）に発表されたすべての小説を対象として、形態素の n-gram、品詞の n-gram、句読点、助詞の使い方といった複数の評価指標を用いて、初期作品と直近作品との間で、顕著な文体的差異が存在しているかについて明らかにした。作品の長さによる影響を抑えるために、個人文体が安定して現れると考えられる 10,000 字を目処として、中・長編小説の冒頭から段落単位で分析用サンプルを取り出すことにした。なお、各対象著者の時期別サンプル数が同じになるよう、比較的寡作な著者の作品に対して、冒頭抽出のほか、中盤と終盤からの抽出も行うことにした。

分析方法として、距離に基づいて、性質を異にする個体サンプルを複数のクラスターへと自動的に振り分ける階層的クラスタリング（hierarchical clustering analysis）と、高次元データを低い次元数に圧縮して、視覚的な考察が可能な主成分分析（principle component analysis）を採用した。最後に、前述した複数の評価指標データを利用したランダム・フォレスト（random forest）による分類分析を通じて、対象著者それぞれについて、デビュー期から最近までの文体変化の具合の定量化も試みた。

本発表が、近々行う予定の大規模調査研究の予備実験という位置付けであるため、人数と作品数の両方に関して、意図的に絞るようにしたが、最終的には、一定数以上の著者の全作品を分析対象に入れる予定である。

参考文献

財津亘・金明哲（2019）. 文体の個人差と個人内恒常性の検証―階層ベイズモデルによる学術論文の比較―. 行動計量学, 46(2), 87-95.

研究発表
第 2 会場　外国語学部棟 010 教室
第 1 部 13:50-15:20　司会：中村友紀（関東学院大学教授）

小説に描かれる人間とロボット
―アイザック・アシモフ、デボラ・インストール、カズオ・イシグロの小説からの考察―
武富利亜（近畿大学教授）

人間の代わりに労働をしてくれる機械人間、または人造人間を製造するという着想を文学に取り入れたのは、ギリシャの詩人ホーマーで紀元前八世紀ころといわれている。「ロボット」という概念は、1920 年にチェコスロバキアで出版された、カレル・チャペックの『R. U. R.』（*Rossum's Universal Robots*（R. U. R.）で誕生した。劣悪な環境の中でも黙々と働く機械人間を想像して物語を描いたそうである。チャペックの小説は世界中で翻訳された。やがてロボットを現実的に製作しようと第一次ロボット・ブームが世界中でおきたのは 1927 年にドイツで『メトロポリス』が封切られた直後からだと言われている。それから約二十年後、アイザック・アシモフが『われはロボット』（*I, Robot*）という小説を 1950 年に出版した。そのなかで彼は、ロボット工学三原則を発表する。この三原則は、それ以降に制作されるあらゆるロボット・アニメーションや SF 映画に大きな影響を与えている。

インターネットが普及し、米国 BIG４[1]（GAFA）が誕生した 2004 年から十余年のうちに、全世界の人々の生活は、劇的に変化した。現実世界よりも先に、社会情勢や最新技術を取り込みやすい傾向にある映画産業は、2013 年には早くも人工知能 A.I.や OS などを題材にとりあげるようになる。小説に描かれるロボット物語は、映画と比べると注目度は高いとはいえないが、作者の哲学や現代社会に投げかける問題点が文字で描かれるため掴みやすい。2016 年に出版されたデボラ・インストールの『ロボット・イン・ザ・ガーデン』（*A Robot in the Garden*）は、アシモフの原則を活かしながらもロボットと人間の善と悪をうまく描出している。2021 年に発売されたカズオ・イシグロの『クララとお日さま』は、ヒューマノイドに近いヒト型ロボットと人間の共生を描いている。アシモフ、インストール、イシグロの小説を比較検討し、作者が言わんとするロボットの進化に対して人間はどう対処するべきか、小説に描かれる問題の核となるものは何かを明らかにし、来る「ロボットとの共生」に向けて現代を生きる我々はどう準備するべきかを検討したい。

[1] Alphabet (Google), Apple, Facebook (Meta), Amazon

研究発表
第 2 会場　外国語学部棟 010 教室
第 1 部 13:50-15:20　司会：中村友紀（関東学院大学教授）

莫言の作品における「魔術的な抵抗」と「真実な歴史」
―『赤い高粱一族』『白檀の刑』を手掛かりに―

耿義（宇都宮大学大学院博士後期課程）

中国の近現代史では外国の侵略に抵抗する歴史と言える。この歴史について中国政府の立場は歴史全体の描写に焦点を当て、旧政府に対する批判、及び革命勢力の進歩などを強調する。しかし、底層庶民が果たした役割について解釈は不足である。1980 年代、改革開放を伴い、中国の作家たちは、近現代史を解釈する際に、政府とは異なり、庶民の抵抗に着目する。代表的なのは、2012 年のノーベル文学賞を受賞した莫言が創作した２つの長編小説『赤い高粱一族』『白檀の刑』である。これらの作品は、膠州半島の農村を舞台に、ドイツによる鉄道敷設とそれに対する底層庶民の抵抗、及び日本による侵略とそれに対する抵抗を扱っている。同時に、莫言は作品の中で庶民の「魔術的な抵抗」と「真実な歴史」を組み合わせ、魔術的リアリズムの作品を創作した。さらに難しいことは、厳格な言論環境の中でも、莫言が底層社会、真実の歴史、庶民に焦点を当て、政府を中心とした社会の上層部を中心に描かれることではなく、民衆や民間のレベルで書いていく。そこで、本発表ではこの両編の小説を分析し、莫言は庶民の抵抗歴史を構築することについて探究する。さらに正史から消去された庶民たちの歴史を浮き彫りにすることによって、中国政府が推し進めた革命の意義を問い直したい。以下の要領で考えてみたい。

1. 作品における庶民たちの抵抗
2. 庶民の抵抗行為の魔術性
3. 魔術的リアリズムの中国近代史
4. 魔術的リアリズム手法を選択する原因
5. 庶民の歴史に着目する描写の影響

研究発表
第 2 会場　情報社会学部メディア棟 128 教室
第 1 部 13:50-15:20　司会：中村友紀（関東学院大学教授）

夏目漱石のアンドロイドをめぐって
―死生観を中心に―
中野優子（東北学院大学助教）

大正５年 12 月に亡くなった夏目漱石（1867-1916）は、亡くなった当夜に門弟である森田草平(1881-1949)の発案にて、彫刻家の新海竹太郎(1868-1927)の手によりデスマスクがとられた。当時の知識人の間で、ベートーベンのデスマスクが話題となっていたことから、森田がこの案に思い至ったであろうこと、漱石のデスマスクが日本で最初にとられたデスマスクであったこと、漱石のデスマスクが新聞誌上で賑わい有名になったことにより知識人の間にデスマスク・ブームが起こったこと、日本では欧米とは違い、「偉人崇拝」のみ取り入れられたことなどについて、『新聞記事から読み解く明治デスマスク・ブーム　ブームの火付け役・夏目漱石』（比較文化研究 138 号）でまとめた。本発表はその続編の位置づけとなる。

2016 年に二松学舎大学と大阪大学の共同プロジェクト（漱石アンドロイドプロジェクト）として、３Ｄスキャン技術を駆使し、この大正５年にとられた漱石のデスマスクをもとにアンドロイドが作成された。そして、アンドロイド完成披露記者会見では漱石の孫である夏目房之介氏の声が AI 技術によって吹き込まれ、漱石の短編作品である『夢十夜』が漱石アンドロイドによって朗読された。漱石のデスマスクは当時、ブロンズが 2 面（1 面は朝日新聞社に、もう 1 面は夏目家）とられたのであったが、夏目家のものは戦災で焼失してしまった。朝日新聞社のものは一時行方不明となっていたものの、朝日新聞社大阪本社で発見され、現在に至るまで当時の状態のまま保管されている。今回のプロジェクトには、この朝日新聞社で保管されているブロンズのデスマスクが貸し出された。

そもそも、なぜ漱石のアンドロイドを作ろうとなったのであろうか。その動機となったものは何だったのであろう。また、人間に終わり（＝「死」）があるように、漱石アンドロイドにも「死」は存在するのであろうか。漱石の死後にデスマスクをとったのも人間であったが、漱石アンドロイドを生み出したのも人間であった。アンドロイドに死があるとするならば、そのアンドロイドの終わり（＝「死」）に、それを創り出した人間はどのように関わっていくべきなのであろうか。

以上、本報告では上記の問いの究明に挑み、今後議論の的となるであろう AI 技術によって誕生したアンドロイドにまつわる死生観を検証するものである。

研究発表
第 2 会場　情報社会学部メディア棟 128 教室
第 2 部 15:30-17:00　司会：八尋春海（西南学院大学教授）

太平洋戦争勃発前後における重光葵の政治外交政策
―生い立ちから巣鴨プリズン出所後まで―
枦山剛（国立鳥羽商船高等専門学校教授）

今回は山本五十六の盟友であった堀悌吉と同郷で、大分県杵築中学（現大分県立杵築高等学校）出身の重光葵について考察する。重光は 1887 年（明治 20 年）に大分県大野郡三重町（現豊後大野市）に生まれるが、漢学者の父親の影響で子供のころから朝の沐浴と教育勅語の朗読を日課としていた。そのせいか、東京帝国大学（現東京大学）法学部卒業後、外務省に勤務して以来、重光は大事を行う前に必ず伊勢神宮を参拝することが習慣になっていた。

昭和天皇の信頼も厚かった重光葵は、1946 年（昭和 20 年）9 月 2 日、日本政府全権としてミズーリ号艦上で降伏文書に調印した人物であるが、ビルマ・ルートの一時閉鎖や戦後の占領軍による軍政阻止などは、重光の高い外交交渉能力を示していると言える。

一方、連合国側のプロパガンダにより、戦後の日本人は、先に述べた『大東亜共同宣言』は、日本が自らの侵略戦争を肯定するために、強引にアジア人に合意させたというイメージを持つ人も多いけれども、重光葵は「大東亜戦争の目的はアジアの解放である。」と宣言するなど、彼の外交官としての天才的な構想力とそれを実現する行動力には目を見張るものがある。

実際のところ、重光葵の洗練された英語力と国際関係の分析は、当時のイギリスからも高く評価されており、その一方で、漢学者の父親のもとで育ち、毎朝沐浴し、政治家になってからも伊勢神宮参拝などを定期的に行っていたことからもわかるように、どのような逆境や困難に遭遇しても彼は精神的に強く、必ず打開策を思いつき、実行に移している。

今回の報告では、戦後の極東国際軍事裁判において、A 級戦犯として、逮捕・起訴されて、禁固 7 年の刑になるものの、戦後政界に復帰し、日本の国際連合加盟にも尽力した重光の一連のやり取りにふれながら、述べていくこととする。加えて、重光が獄中の中で記していた『巣鴨日記』を今後さらに検証していくことも、今後重要となるであろう。

【主要参考文献】
・武田知己『重光葵と戦後政治』吉川弘文館、2002 年
・大分県先哲史料館編『大分県先哲叢書　重光葵資料集』第一巻、大分県教育委員会、2023 年
・重光葵著/山岡鉄秀解説『巣鴨日記―獄中から見た東京裁判の舞台裏―』ハート出版、2023 年

研究発表
第 2 会場　情報社会学部メディア棟 128 教室
第 2 部 15:30-17:00　司会：八尋春海（西南学院大学教授）

小畑薫良の李白詩英訳と 20 世紀中国海外留学生との関係

欒暁涵(関西大学大学院博士後期課程)

本発表は、小畑薫良(1888-1971)がアメリカで出版した *The Works of Li-Po : the Chinese Poet* (1922)について、この李白詩英訳本が成立し受容される過程で、海外留学経験のある中国人がどのように関与したのかを明らかにすることによって、同書が世界的な文化交渉のなかで生み出した影響を探る。

The Works of Li-Po は、李白詩 124 首の英語訳を収め李白単独の英訳本としては世界で最も早いものである。同書は出版されて 6 ヶ月後には版を重ね今に至るまで影響力を持ち続けている。そして、重要なことは小畑自身、20 世紀初のアメリカ自由詩の影響を受け自由詩のスタイルで李白詩を英訳したことであり、それは同書がいまだに影響力もつ理由だと考えられる。

The Works of Li-Po は英語圏だけでなく近代中国の詩人・文学者に注目されることとなった。1920 年代にアメリカに留学し当時の自由詩運動の影響を受けた聞一多(1899-1946)は、帰国後の 1926 年、同書の書評を発表する。この書評は同書を高く評価する一方、数点の批判を展開する。その批判のなかには詩歌の韻律論・リズム論に関するものもあり、アメリカ留学時代にすでに中国語自由詩を発表していた聞一多にとって、李白詩という中国古典詩を小畑が英語の伝統的韻律を用いずに英訳した *The Works of Li-Po* は、聞自身が目指す新しい自由律詩の創造に強い刺激となったと考えられる。聞一多の書評の 2 ヶ月後、小畑はそれに答えるかたちで英語の文章を書いた。これを徐志摩(1897-1931)が中国語に翻訳し徐はまた小畑の文章にコメントを寄せた。徐も聞一多と同じようにアメリカ留学の経験を持ち中国口語詩のジャンルを切り拓いた人物である。

なお、小畑が李白詩を英訳し、*The Works of Li-Po* を完成させる際には、小畑と同じくコロンビア大学に留学していた複数の中国人留学生に、李白詩の解釈について助言を得ている。その一人に、後に中国哲学者として大成した、馮友蘭(1895-1990)がいる。実は、小畑自身、大阪の漢学者を父に持ち、漢詩漢文の素養を受け継ぐ家庭環境で育った人物なのである。つまり、*The Works of Li-Po* は、単なる李白詩の英訳本ではなく、小畑自身の漢学の素養が投影され、また中国の伝統的な学術の成果も取り入れられ、しかも、20 世紀初のアメリカ自由詩の影響を受けて翻訳された、複雑な層を持つテキストなのである。

今回の発表では、*The Works of Li-Po* が持つ複雑な相について、20 世紀中国海外留学生との関係から解明したい。

研究発表
第 2 会場　情報社会学部メディア棟 128 教室
第 2 部 15:30-17:00　司会：八尋春海（西南学院大学教授）

AI 技術との協働を補助線に行う村上春樹文学の死生観研究の体系化
―『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』における死生の描写―

曾秋桂（台湾淡江大学教授）

村上春樹の第 13 作目の最新長編小説『街とその不確かな壁』(新潮社、2023.4)では、幽霊子易を登場させ、語り手の「私」と日常生活の中で会話を交わすシーン、いわば死者が生者と違和感なく会話しているような描写は過去に類を見ない。最新長編とはいえ、実は句読点の表記以外、旧作中編「街と、その不確かな壁」(『文學界』、1980.9、全集未収録)の書き直しがこの小説の第一部となったのである。さらに、この旧作中編の翌年に、父親に芭蕉の「幻住庵」に連れてもらう体験に基づいて発表したエッセイ「八月の庵―僕の「方丈記」体験」(『太陽』、1981.10)がある。そこには生に「存続する死」の死生観が厳然として示さている。と同時にエッセイにも処女作『風の歌を聴け』(1979)が触れられている。前述の作品群(以下、関連作品群と略す。)の生成プロセスを時間軸に見てみると、最新小説『街とその不確かな壁』に見られる死と生との関係が初期の関連作品と深く関わっていることが分かった。

村上春樹が作家としてデビューした最初の 10 年間に書いた小説群を、内田康[1]は「四部作」、「ノルウェイ」、「世界の終わり」の三系列に分類した上、旧作中編が「初期の三系列を繋ぐ、まさにミッシング・リングなのだ」[2]と主張している。また、村上春樹が旧作中編を基に、5 年後に改めた第 4 作目の長編小説『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(1985)とその旧作中編「街と、その不確かな壁」との創作関係については、小島基洋は「「街と，その不確かな壁」は主人公〈僕〉が〈死んだ恋人〉に会いに行く、一種の冥府下りの物語」[3]と指摘している。関連作品群に多くの死が仕込まれた一端も伺える。

村上春樹文学の死生観研究を体系化するにあたり、本発表では第 4 作目の長編小説『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』を取り上げて、そこに描かれた死生の描写を明らかにする。次に、関連作品群で明らかにされた死生の描写と比較・対照する。最後に AI 技術データマイニングを応用・解析した結果を参考に、浮かび上がってきた情報を参照しながら、村上春樹の第 4 作目の長編小説における死生の特徴を総括的に見極める。このように、AI 時代に欠かせない AI 技術を利活用し、いわば AI と HI(Human Intelligence)との協働を補助線に、村上春樹文学の死生観研究を体系化する所存である。

---

[1] 内田康(2011)「村上春樹初期作品における〈喪失〉の構造化―「直子」から、「直子」へ」『淡江日本論叢 23 号淡江大學日本語文學系 P87

[2] 同注 1、P88

[3] 小島基洋(2016)「天上で輝く星,岸に打ち寄せる海,革命家と結婚したクラスメイトー―村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』における〈削除〉と〈改竄〉の詩学―」『人間環境学』第 25 巻京都大学大学院人間・環境学研究科 P8

研究発表
第 3 会場　情報社会学部メディア棟 324 教室
第 1 部 13:50-15:20　司会：林裕二（西南学院大学教授）

西洋における竹の認識の成り立ち
―葦と竹の形態・名称・用途の関連性を中心に―
岩松文代（北九州市立大学教授）

人類は、世界の植物の情報を言語によって伝達しつつ、広域を探検して植物を採集し、それらを遠距離へと移送することによって、植物を伝播させてきた。人は、異国の植物を説明したり、名付ける場合、その外国語の名称を自国の言語に合うように音声を変形したり、あるいは、類似する自国の植物の名称を用いた新名称を作ることもある。こうした説明や新名称に用いられた言葉は、引き合いにされた自国の植物と、その異国の植物に対する認識の類似性を知る手がかりとなるだろう。

本研究では、竹（現代の bambù、bambou、Bambus、bamboo ほか）を対象として、古代から西洋諸国で記述されてきた博物学や植物学の文献をもとに、名称とされた言葉や説明された文章によって、竹に対する初期からの認識について考察することを目的とした。世界で竹の分布する地域は、降水量が多く、気温が一定の高さを保持する温帯から熱帯であり、欧州を含めた寒冷地帯には、竹は基本的に自生していなかった。そこで、西洋諸国において異国の植物である竹が、どのような言葉を用いて説明されてきたかを調査した。

その結果、古代ギリシャ・ローマでは、古来、西洋諸国に生育していた、竹に類似する植物の形態や名称との関連性がみられ、とくに calamus（葦、矢、茎）・harundō（葦、矢）は竹と形態が似ており、材料としての用途も重なっていたことがわかった。西洋諸国における初期の竹の認識が、calamus との関連性を表現していたことからは、竹には「細い樹木」というより「大きな葦」という草本の概念があったことがうかがえ、これが竹の形態の把握における言語的、文化的な一側面になっていたといえよう。

さらに、大航海時代にいたっては西洋と熱帯・温帯諸国との交易が盛んになり、reed（葦）、cane（杖、茎、籐）、rotang・rattan（籐）などの形態と意味も、竹に類似するものとして用いられていくが、そこからも竹の認識を把握した。

こうした言葉は、学名にも使用されるようになり、現代にいたるまで西洋諸国の言語圏において、竹の特性に対する認識に影響を与えていると推測される。

研究発表
第 3 会場　外国語学部棟 010 教室
第 1 部 13:50-15:20　司会：林裕二（西南学院大学教授）

イタリア系英国人写真家フェリーチェ・ベアトによる景観の表現

矢島真澄美（東北学院大学特任准教授）

イタリア系英国人フェリーチェ・ベアト（Felice Beato, 1834-1909）は、幕末から明治にかけて、日本の風景や風俗を数多く撮影し、外国人職業写真家たちの先駆けとなった人物である。今日、彼は日本を紹介するための写真アルバム、横浜写真の創始者とされている。横浜写真とは、明治期に日本を海外へ紹介する役割を担った写真帖を指す。ベアトが撮影した作品は、彼が廃業した後も、1880 年代半ばまで、20 年以上もの間、横浜写真の種板として転売や修正がされながらも使われていた。

ベアトが写真家として活動していた 19 世紀後半、ヨーロッパの写真界では写真を芸術として社会に認めさせることを目的としたピクトリアリズム運動が行われていた。そして覚芸術における写真の価値が模索される中で、彼がインドや中国の戦場で撮影した作品もまた芸術として扱われていた。このことは、幕末から明治にかけてお土産用写真を撮影していた来日写真家たちにもヨーロッパ写真界の芸術運動が影響していたことを示している。

先行研究では、打林（2015）が日本における写真芸術に扱っているが、分析対象が 1880 年代以降の日本人写真家に限られている。1860 年代に来日外国人写真家が異文化を紹介する目的で撮影された写真について、芸術に対する写真家の解釈を含む撮影者の視点までは検討されておらず、表現における作品分析は十分ではない。横浜写真の創始者とされるベアトとピクトリアリズムとの関係と撮影者としての視点を明らかにすることは、日本の写真史にも新たな視点を加えることにつながる。

そこで本発表では、ベアトの写真帖『日本の風景』と『日本の写真 完全版』を扱い、19 世紀後半のピクトリアリズム運動という写真界の動向を整理しつつ、景観を題材とした彼の作品における表現を考察し、日本の景観がどのように海外に提示されていたのかを検討する。

研究発表
第 3 会場　外国語学部棟 010 教室
第 1 部 13:50-15:20　司会：林裕二（西南学院大学教授）

「アート」から「道」へ
―Alfred Koehn の著作にみるいけばな表象の展開―
Malgorzata Dutka（大阪大学研究生）

周知の通り、現在日本の伝統文化として世界的に知られている ikebana は 19 世紀末に「フローラルアート」として Josiah Conder に「発見」され、欧米に紹介された。しかし、Conder はその著書において「いけばな」という日本語の単語を一度も使用せず、詳細に描いたアレンジメント様式も近世に形成した生花のみである。

日本国内外において「いけばな」概念と表象が成立したのは 1930 年代だといえるが、その内容とあり様はドイツ出身の Alfred Koehn（?-1965）の著作 *The Art of Japanese Flower Arrangement*（1933）と *The Way of Japanese Flower Arrangement*（1935）において鮮明に捉えられている。本報告ではこの二つの図書を分析の対象として、その構造と内容を比較しながら、ikebana および kadō という概念の紹介と受容の仕方を明らかにする。特に、「花道」の解説は外国人の執筆した著書でははじめてのもので、その記述内容は注目に値する。

考察の結果、Koehn は著書 *The Art…*で「いけばな」という概念を漢字の音読み・訓読みの意味から解説し、立花・砂物・生花・投入れ花・盛花（つまり、近世や近代に成立したアレンジ様式）を含む fine art として定義した。ただし、立花は複雑で西洋での実践に適していないとしてその技術的な説明を割愛し、容真流の生花を中心に描写している。そこで論じられた生花の主な原理は「天地人」の構成要素、全体や部分に見いだせる「想像上の三角形」や立体的な配置など、戦後のいけばな表象にみられる典型的なものである。

なお、Koehn はいけばなの技術や道具を扱った章に続き、歴史的発展と「花の哲学」について述べ、「哲学」として中国の「性別の原理」を挙げ、そしていけばなを嗜むことで得られる「十徳」についても言及している。数年後に著した「花道」論説への展開を示唆する部分であるといえる。

一方、もう一つの著書 *The Way…*の序文でも Koehn は「いけばな」と「花道」概念の解説から始めているが、前者はフラワーアレンジメント芸術の物質的・物理的な側面、後者はむしろ内面的・精神的な側面を表しているという。*The Art…*の構造とは対照的に、この著書は池坊の伝統に基づくいけばな史、花器など道具の紹介、床の間、花材の取り合わせなどの順に記述が展開し、立花から茶花までのアレンジ様式を紹介している。そして、「結論」の部分では改めて「花道」の在り方を論じ、いけばなは純粋芸術でありながら、宗教哲学でもあると強調している。その目的は自我と自然との融合を通して God（神）とのかかわりを得ることにあるというが、そこで God は西洋文化の文脈で解釈されている。つまり、Koehn はいけばなを「道＝宗教哲学」と位置付ける際、前提にしていたのは仏教ではなく、キリスト教であったといえる。戦後の「花道」と「禅」の結びつきを強調するいけばな表象の準備段階をここにみることができる。

研究発表
第 3 会場　外国語学部棟 010 教室
第 2 部 15:30–17:00　司会：那須野絢子（常葉大学講師）

苦海は浄土か？
―杢太郎と智子のあいだで―
横地徳広（弘前大学准教授）

本発表では、石牟礼道子『苦海浄土』（池澤夏樹＝個人編集、世界文学全集第三集、二〇一一年）とウィリアム・ユージン・スミス＆アイリーン・美緒子・スミスの写真集『MINAMATA』（クレヴィス、二〇二一年）を読み解き、両者に登場する胎児性水俣病患者の杢太郎と智子にとって、この二人が生きた「苦海」は「浄土」たりえたのか、あるいはそうなりえたのかを考える。

さて、水俣の「苦海」とは別の「苦界」を眼差した哲学者九鬼周造が吟味するに、孤悲仲の二人はその双数的ならざる双数的実存において互いにみずからが芸術作品となり、そうした化身の双数的再帰性によって苦界は瞬間的永遠の浄土になりえた。

これに対して、ユージン・スミスが写真集『MINAMATA』に収めた「Tomoko and Mother in the Bath」を撮影したさい、「Beautiful」ともらした場面がジョニー・デップ監督・主演の映画作品『MINAMATA：ミナマタ』にある。

いかなる意味で、何が「Beautiful」なのか。

何ほどか九鬼的に智子とその母親はみずから芸術作品へと化身したのか、あくまで「Tomoko and Mother in the Bath」はユージンの作品なのか、あるいは何かがそこへ集まり、一つの作品になったのか。

美とは近代美学と現代アートのあいだでその意味合いが異なることをふまえつつ、「Tomoko and Mother in the Bath」をめぐって「芸術ならざる芸術」への問いが成り立つ可能性を吟味する。

このとき、祖父が胎児性水俣病患者の孫である杢太郎にかけた言葉、「杢は仏だ」の意味を思索し、善きものが美しく、美しいものが善いとされた古代思想を省みながら、母親の身体にたまった有機水銀を人間の生理学的構造ゆえに引き受けた胎児性水俣病患者の何かが善で何かが美なのか、あるいは、「身代わり」など、既存の概念や言葉でそれを語っていいのか、その是非を考察する。

これらは、作品にそくして言えば、行き着くところ、なぜ『苦海浄土』や『みなまた』は現世に現われ、読まれえたのかという問題でもある。

研究発表
第 3 会場　外国語学部棟 010 教室
第 2 部 15:30-17:00　司会：那須野絢子（常葉大学講師）

清末中国の唱歌遊戯作品からみる明治日本の遊戯唱歌の受容

呂政慧（名古屋大学大学院博士後期課程）

本発表は、清末中国の唱歌遊戯教材を取り上げ、同時代日本の遊戯唱歌教材との比較を行い、中日における教育文化の関連性を論じるものである。

清末の中国では学校制度や実際の教科書、教員の育成、教育方法等、様々な面で「明治維新」後の日本をモデルにして学んだ時期があった。留学生を通じて「新式学堂」に唱歌も導入した。しかし、初等教育に音楽を導入する際、学生に教室の中に唱歌を歌わせるだけではなく、室外（運動場）で唱歌を歌うとともに遊戯する、所謂「唱歌遊戯」（或いは「遊戯唱歌」、「表情体操」等）という音楽と遊戯（体の動き）を結合する教育方法も採用された。日本では白井規矩郎が編纂した『遊戯唱歌大成・実験詳説』(1900 年)、鈴木米次郎編『日本遊戯唱歌』(1901 年、全 7 巻）や山田源一郎・高橋忠次郎編『実験唱歌遊戯教授書』(1901 年）等に収録している遊戯唱歌と、中国の曽志忞の『教育唱歌集』(1904 年初版、1906 年訂正四版)、王季梁・胡君復編訳『唱歌遊戯』(1906 年初版、1926 年十四版)、徐紹厳・孫挨編『表情体操教科書又名唱歌遊戯』(1907 年）に収録している遊戯唱歌と比べ、中日の遊戯唱歌作品の関係性を見出した。

「指遊び」、「花の園」、「運動会」、「艦隊」、「桃太郎」、「雲雀」等の日本語の遊戯唱歌は中国語の唱歌遊戯作品となったことが分かる。そして、日本の遊戯唱歌を受容する際に、日本の唱歌のメロディーをそのままで歌詞と遊戯法を適宜に変化させたことが分かった。「合唱」、「列を作る」、「円を作る」等、「唱歌遊戯」の中に取り入れたこれらの動きは、子供に学校生活を楽しんでいる目的だけではなかった。当時の中日両国の唱歌遊戯作品を比べ、それぞれに近代国民を育て上げる為に子供の身体表現も規制されたことを指摘できた。

研究発表
第 3 会場　外国語学部棟 010 教室
第 2 部 15:30-17:00　司会：那須野絢子（常葉大学講師）

「満洲国」の中国人小学生向けの日本語教科書におけるプロパガンダ

符旖恩（広島大学大学院博士後期課程）

本発表では、教科書というメディア素材によるプロパガンダ的側面と教科書編集者の主体性を着目し、「満洲国」の中国人小学生向けの日本語教科書におけるプロパガンダを検討する。

「満洲国」の中国人小学生向けの日本語教科書についての先行論では、管見の限り、「満洲国」樹立以後の教科書に注目する一方、樹立初期に使用された『第二種初等日本語読本』が見落とされる傾向が見られ、全ての教科書を網羅的に検討する論考は見られない。教材分析を行った研究では、日本人像・日本人価値観や軍国主義・国家主義などの側面から分析を展開することによって、教育の一環としての教科書の役割を論じたが、必ずしもそれらの日本語教科書におけるプロパガンダの主題を代表できるとは言えない。また、メディア素材の一種に属する教科書が、プロパガンダ活動における位置づけについても触れていない。そこで、本発表は、メディア素材としての教科書では、いかなるプロパガンダを行ったかという問題を明白にすることを狙いとし、「満洲国」存続期間において、日本語教科書の編輯者の教育理念と国策との関連性から入手し、「満洲国」樹立初期の教科書も含めて、全ての中国人小学生向けの日本語教科書の変遷をまとめ、教材におけるプロパガンダ的表現に関する質的・量的分析により、言論統制下で教科書の編輯者の国策への反応を構造的に把握し、プロパガンダの主題と教科書が「満洲国」の児童向けプロパガンダにおける位置づけを解明することを試みる。

教科書編輯者の主体性に着目することによって、国策と編集者理念の結合物としての教科書のプロパガンダ的側面を再認識でき、「満洲」の児童メディア史におけるプロパガンダと教科書の関係の新たな一面が解明できると考える。

参考文献

1. 磯田一雄「『満洲・満洲国』日本語教科書の一断面」『コミュニケーション紀要』12、1998 年４月、pp. 51-76
2. 竹中憲一 「解説『満州』における日本語教科書の変遷」『「満州」植民地日本語教科書集成 7』緑蔭書房、2002 年、pp. 391-442
3. 伊月知子「『満洲国』の日本語教科書に見られる特徴とその役割について―文教部審定『初級小学校日本語教科書』ほか―」『中国文芸研究会会報』第 400 期記念号、2015 年３月 29 日 pp. 2-8
4. 王詩淇 『「満洲国」初等学校の日本語教科書に描かれた日本人像』日本植民地教育史研究会運営委員会編『植民地教育史研究年報』 2022 年、 (25)pp. 83-101

研究発表
第 4 会場　情報社会学部メディア棟 325 教室
第 1 部 13:50-15:20　司会：白鳥絢也（常葉大学准教授）

多文化共創社会の実現を目指すパブリック・マネジメント
―新宿区の取り組みから―
郭潔蓉（東京未来大学教授）

新宿区は、今も昔も多くの外国人が去来し、自他共に認める多様性豊かな町である。特に近年では、その多様性と地域の多文化共生政策に多大な関心が集まっている。

新宿区の直近の外国人住民は 42,214 人[1]、新宿区民に占めるその割合は実に 12.1%に上る。新宿区は、全国の市区町村単位においても、常に外国人住民の数と町の総人口に占める外国人比率の首位を争う自治体である。

しかし、新宿区が注目を集めるのは、その外国人人口の多さだけではなく、自治体と地域が一体となって進めている多文化共生政策の特質性にある。その取り組みの大きな特徴として「地域住民主体」で実施することを重視している点が挙げられる。多文化共生を自治体の事業として掲げている市区町村は数多くあるが、地域住民を主体として事業を推進しているところはまだ数少ない。また、地域住民主体を実施している自治体の中でも、新宿区は、多文化共生の推進において、住民の声を区行政に反映させることを先進的に行っている自治体でもある。

新宿区が多文化共生政策に力を入れる背景には、多様性を育んできた地域の歴史的な特質性がある。マスメディアなどで取り上げられる新宿区は、大久保地区やその周辺などに集住し、1980 年代あたりから新たに急増した「ニューカマー」と呼ばれる外国人住民がクローズアップされることが多い。しかし、実際には戦前から居住する「オールドカマー」と呼ばれる外国人住民も新宿区の多様性の一翼を担う重要な存在であることを認識することが大変重要である。また、新宿区は大学や専門学校等の高等教育機関や日本語学校が数多く点在している地区であり、区内の外国人住民の大きな割合を占めているのが「留学生」であることから、外国人住民の転出入が非常に流動的であるという特徴をもつ。つまり、長く定住する外国人住民がいる一方で、若年層の外国人住民の流動性が非常に高いことが特徴的である。従って、新宿区における多文化共生事業は、新旧の外国人住民のニーズに応え、高い流動性にも対応した取り組みが必要となってくる。

本発表では、これらの特徴を踏まえ、新宿区の多様性の現況を統計的な側面から浮き彫りにし、同区において日本人住民と外国人住民の共創社会をどのように醸成してきたのか、地域の取り組みを通して探求してみたい。加えて、この変革の時代において、新宿区が数多くの外国人住民を抱える自治体として、どのようなパブリック・マネジメントを実践してきたのかを明らかにしたい。

[1] 新宿区 HP「新宿区の人口」の「最新の人口」（2023 年 8 月 1 日現在）より引用。

研究発表
第 4 会場　情報社会学部メディア棟 325 教室
第 1 部 13:50-15:20　司会：白鳥絢也（常葉大学准教授）

被支援者から支援者へ
―外国ルーツの人々のコミュニティでの活躍―
田中真奈美（東京未来大学教授）

はじめに

日本に在住する外国人の増加と長期化・定住化に伴い、日本生まれの二世や三世が誕生し、外国ルーツの人々の地域参加が進んでいる。地域の特徴に合わせて、様々な活動がある。本発表では、A 県 B 市の外国人の支援活動をしている団体で、正規職員として勤務している外国ルーツの松田氏（仮名）を事例として取り上げ、報告する。

方法

調査対象者・手続き　外国ルーツの人々の地域参加の特徴や課題を明らかにすることを目的とし、外国人住民が比較的多く在住している A 県 B 市を調査対象地とし、国際交流活動・支援団体の正規職員である外国ルーツの人を調査対象者とした。

手続き　2023 年 8 月に同地を訪問し、松田氏に 1 時間半ほど聞き取り調査を実施した。経験について自由に語ってもらうため、半構造化面接で実施し、特徴を分析・考察した。

松田氏の略歴　A 県 B 市の国際交流活動団体で支援を受けていた外国ルーツの人である。家族とともに来日し、日本語を猛勉強し、習得した。家庭言語は両親の母語である。外国人で大学へ進学する人が少ない状況の中で、日本で生きていくために教育が必要と考え、両親の希望もあり、大学へ進学した。自身の経験を外国ルーツの人々のために活かしていきたいと考えている。母語と日本語のバイリンガルである。

結果・考察

１）日本語習得の課題

来日後、日本の幼稚園に入園した。会話は幼稚園の友人から自然に習得した。小学校は帰国を前提に外国人学校に通学したが、両親が日本での永住を検討したため、小学校高学年で日本の学校へ転校した。しかし、外国人がほとんどいない学校だったので、適応できず、再度外国人学校に転校した。中学生の時、日本の高校へ進学するため、再び日本の学校へ転校した。中学校に転校した時、漢字は全くできなかった。外国人も多く在籍し、国際教室のある中学校だったので、サポートもあり、常用漢字や文法を覚えていった。現在でも漢字を書くことは自信がないが、読むことの不自由はなくなった。松田氏の語りから、日本語の習得や学校への適応には、環境や周りのサポートが大切であることがわかった。

２）支援者となってからの経験

現在の支援団体では。母語を使用し、サポート業務などを行っている。自身の経験から、外国につながる子ども達は、目標がないと、勉強へのモチベーションが持続できず、キャリアパスが想像できないため、高校進学を諦めてしまうことが多い。団体のプログラムとして、大学生との交流など様々な方法で目標を持てるように工夫している。子ども達には、自身のルーツに誇りを持ち、将来日本で活躍する人材になってほしいと希望している。

研究発表
第 4 会場　情報社会学部メディア棟 325 教室
第 1 部 13:50-15:20　司会：白鳥絢也（常葉大学准教授）

わが国の教育課程の変遷を見つめる
－特に「昭和」の学習指導要領に注目して―
白鳥絢也（常葉大学准教授）

本発表では、わが国の教育課程変遷の大きな流れ（「経験的」な学習（見る・聞く・話す）重視と「系統的」な学習（読み・書き・計算）重視の往来）を抑え、学習指導要領の求めるものを改めて捉え直していきたい。その際、特に「昭和」の学習指導要領に注目する。

1947（昭和 22）年度版の学習指導要領（総則）は、同年 3 月 20 日に刊行され、小学校・中学校における教育の目標、教科課程、学習指導法、学習結果の考察等が明記されている。わずか 52 ページの薄い冊子である。また、表紙には（試案）の文字が印字されている。

以下、「昭和」におけるその後の学習指導要領改訂のポイントについて概観する。

1951（昭和 26）年度版の学習指導要領（総則）は、「学習指導要領使用状況調査」を行いその結果を反映したことと、「教育課程審議会」が設置され教育課程に関する研究・調査・審議が専門家の集いによって検討されるようになったことが挙げられる。

1958（昭和 33）年度版の学習指導要領は、「教育課程の基準としての性格の明確化」が掲げられ、全文が基準であるとし、基準を上回ることも下回ることも好ましくないと指導が入った。また、ここから「試案」の文字が削除され、学習指導要領は「法的拘束力」を持つものとし、官報に掲載されるようになった。改訂のポイントは、「道徳の時間」の新設，系統的な学習を重視，基礎学力の充実，科学技術教育の向上等が挙げられる。

1968（昭和 43）年度版の学習指導要領は、「教育内容の一層の向上」が掲げられ、教科書の内容も扱うべき項目の配列順序も、学習指導要領によるべきであるとした。この時代、わが国は高度成長の進行期にあり、目に見えて庶民の生活が豊かになっていった。改訂のポイントは、教育内容の現代化，時代の進展に対応した教育内容の導入（算数における集合の導入等）等が挙げられる。

1977（昭和 52）年度版の学習指導要領は、「ゆとりのある充実した学校生活の実現＝学習負担の適正化」が掲げられ、教育の荒廃、子どもの心の荒廃が指摘され、「第三の教育改革」と銘打って出されたものである。ここで注目すべき点は、「ゆとり」という言葉を、文部省がこの時点で使用していたことである。改訂のポイントは、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな児童生徒の育成，教育内容の精選，「ゆとりの時間」，各教科等の目標・内容を中核的事項にしぼる等が挙げられる。

その後、時代は平成、令和へと流れ、近年の教育改革はスピーディーに進められている。「主体的・対話的で深い学び」……受け身で、一人きりの学びは、駄目なのであろうか。「プログラミング的思考」「GIGA スクール構想」……そんなに、取り立てて言うほど大事なのであろうか。「不登校」……何が、いけないのであろうか。現場に丸投げな「学習指導要領」は、本当に必要なのであろうか。むしろ、「続々と意見を寄せられ」……昭和 20 年代の（試案）に立ち返るのも、有りではないだろうか。

研究発表
第 4 会場　情報社会学部メディア棟 325 教室
第 2 部 15:30-17:00　司会：水町いおり（中京大学嘱託講師）

沖縄固有信仰における祭祀施設の統合について
森下一成（東京未来大学教授）

沖縄固有信仰に基づく神アサギやトゥンは、それぞれが単体で存在するのが常だが、近年、いくつかの集落でその複数ある祭祀施設を統合する動きがみられる。

１　固有信仰に基づく集落祭祀施設

これまで筆者の報告にたびたび登場する神アサギ、トゥンはもとより、沖縄の固有信仰に基づく祭祀施設は多様であり、集落ごとに異なると述べても過言ではない。とはいえ、神アサギやトゥンに招請する祖先神のいます御嶽（ウタキ）、集落祭祀をつかさどった下級神官ノロの屋敷であるヌル殿内（ドゥンチ）、あるいは集落の有力者とその祭祀をつかさどる根人（ニーンチュ）や根神（ニーガン）の屋敷などは多くの集落で祭祀施設として認識されている。このような諸施設を集落内に散在させるのではなく、一箇所にまとめる集落が出現している。本報告ではこのようなケースについて、特にその経緯を主として報告する。

２　事例

（１）　名護市安部

沖縄県名護市は沖縄本島北部地域、いわゆる「やんばる」の玄関口に位置し、市の東側は太平洋に、西側は東シナ海にそれぞれ面している。安部集落（地区）は市の太平洋側に位置し、太平洋に臨む風光明媚な一帯である。ここに「安部神殿」と呼ばれる祭祀施設がある。「神殿」という名称は沖縄固有信仰の祭祀施設の名称としては珍しい。また施設の規模は極めて大きく、伝統的な神アサギやトゥンなどの設計規範から著しく乖離している。

（２）　名護市瀬嵩

瀬嵩集落（地区）は、先述の安部集落から汀間集落を隔てて西側に位置する。その地勢は近隣であることもあって安部集落に近似している。また、瀬嵩集落からさらに南西に行くと米軍の拠点・キャンプシュワブがあり、新しく基地が建設される辺野古集落がある。瀬嵩集落には安部神殿同様に瀬嵩神殿があるが、これが建設されたのは安部神殿の後である。

（３）　宜野湾市普天間

宜野湾市は、沖縄本島中部地域に位置し、市域の少なくない面積を米軍施設（普天間航空基地、キャンプ・フォスター[1]など）が占めている。市内で最も人口過密な一帯に位置する普天間航空基地は、米軍による土地接収以前、宜野湾、神山、新城、中原の四集落が、キャンプ・フォスターには普天間集落が、それぞれあった。現在、普天間集落の祭祀施設は普天間拝所として一箇所に集められ、それぞれの施設名が石板に刻まれて一列に並べられている。

３　考察

筆者による神アサギ及びトゥンの形態分類ではこのように祭祀施設をまとめて合祀する

[1] 宜野湾市だけでなく、沖縄市、北谷町、北中城村の一部をも占めている。

事例を「合祀所」としていた。しかし、名護市の例のように大規模化、かつ「神殿」化する形態の出現により、これを一括りにすることについては再考せざるを得ないと思われる。神アサギ・トゥンには、神社建築を模している「社殿型」もあり、本研究ではそれを含めた考察となる。

研究発表
第 4 会場　情報社会学部メディア棟 325 教室
第 2 部 15:30-17:00　司会：水町いおり（中京大学嘱託講師）

「妖怪ツーリズム」とは何か
―その意味と研究の流れをめぐる考察―

李江龍（愛知県立大学大学院博士後期課程）

小松（2011）によると、妖怪というのは、不思議的な、神秘的な、奇妙な、薄気味悪い、といった形容詞がつくような現象や存在を意味する。いわば、出来事・現象を「超自然的なもの」の介入によって生じたとみなすとき、それは「妖怪」となる。このような「妖怪」が①出来事(現象)としての妖怪(妖怪・現象)、②存在としての妖怪(妖怪・存在)、 ③造形としての妖怪(妖怪・造形）という三種類に分けられるという。

現在、日本や中国などの東アジアにおいて、妖怪文化を資源として活用する観光地が非常に多い。日本鳥取県境港市の「水木しげるロード」や徳島県の「山城・大歩危妖怪村」、中国重慶市の「豊都鬼城」、台湾南投県の「溪頭松林町妖怪村」など、妖怪文化に基づく観光が東アジアで共通する現象になっており、様々な妖怪文化に基づく観光地が繁栄している。例えば、境港商工会議所の統計によると、2004 年から 2019 年まで水木しげるロードを訪れる観光客数は 77.9 万人から 300.9 万人にまで大幅に増えた。

また、近年、鬼を題材としたアニメ『鬼滅の刃』の魅力が日本にとどまらず、ヨーロッパや中国などの世界諸国に広がっている。それに呼応するように、『鬼滅の刃』の聖地と推測される福岡県の「宝満宮竈門神社」や和歌山県の「甘露寺」、福島県の「大川荘」など、各地の聖地に巡礼者が訪れた。

そうした事例を背景に、妖怪文化の活用と妖怪に基づく観光が注目を浴びて、関連の研究がたくさん展開されている。これまでの論考では、主に化物蝋燭、写し絵などで楽しむ「妖怪娯楽」や地域の伝承を活用する「妖怪町おこし」、物語性に強い関心を持つコンテンツツーリズムの枠組みで妖怪文化を楽しむ見物及び観光が捉えられてきた。

そのうち、妙木（2021）の論考で「妖怪ツーリズム」という言葉が初出した。既存の研究においては、「妖怪町おこし」（松村 2010)、「アニメツーリズム」（山村 2011)、「妖怪文化を活用したコンテンツツーリズム」（市川 2015）などのように、妖怪に基づく観光現象が様々な表記で示され、統一した概念に欠けている。そのため、「妖怪ツーリズム」という表記は、妖怪文化に基づく観光現象を分析する総括的な概念として意義深い。

しかし、「妖怪ツーリズム」という言葉には詳しい説明と具体的な定義がなく曖昧なため、学術用語として定義づける必要がある。

それを踏まえて、本報告ではツーリズムの特徴を捉えたうえで、妖怪文化に基づく観光に関する論考をレビューし、研究のルーツと流れを整理しながら、「妖怪ツーリズム」の意味を明確にすることを目指し、学術用語として、「妖怪ツーリズム」の可能性を提示しようと考える。

研究発表
第 4 会場　情報社会学部メディア棟 325 教室
第 2 部 15:30-17:00　司会：水町いおり（中京大学嘱託講師）

「カラオケ喫茶のママ」にみる幸福論
―私の幸せは此処に―
大崎洋（愛知大学綜合郷土研究所研究員）

多くの著書で、個人における幸福とは、まず、「健康」、「仕事（活動）、「愛情（家族）」と記されている。これが、幸福の核心といえるものである。

本研究では、2022～2023 年、名古屋市内と豊田市内にある代表的なカラオケ喫茶のママ５人にインタビューし、その内容から「カラオケの喫茶ママ」にみる幸福論について考察した。

カラオケ喫茶は、夜だけ営業するスナックとは違い、昼間からカラオケを歌いたいたちが集う場所として、高齢者を中心に広がった喫茶店の一形態である。35～40 年前が発祥といわれる。そこでは、演歌や歌謡曲中心に歌われる。そこでは、ママを中心としたお店の運営がなされ、普通の喫茶店やスナックとは違い、ママとお客さんとの関係が家族・家庭のように濃密である。お客さんは「何よりもママに魅力があり、ママに会えるから」と語る。
インビュー項目は、① ママの来歴等、② お店の概要等、③ ママとして（お客さんに接するときの心がまえ（男性客に対して、女性客に対して）、客さんへの対応で一番苦慮していること、お客さんは、ママをどういう眼でみているか（母親か・友達か・恋人か）、カラオケ喫茶を経営してきて幸せか等）である。

５人のママの平均年齢は 71.4 歳、営業歴の平均は 20 年である。インタビューから共通するものは、

１　映画「男はつらいよ」の寅さんのマドンナ、浅丘ルリ子扮するリリーによく似た雰囲気をもつ。
２　ママは寄り添う人である。
３　母親としての母性にあふれている。
４　菩薩のようなママの存在。
５　幸福なママ。

インタビューしたママは全員、歌が好きであり、多くのお客さんと歌を媒介に触れ合い、「カラオケ喫茶を長く経営してきて、凄く幸せ」と回答している。

健康であり、仕事や活動が充実し、家族内が満たされていないと、ママとして目をお客さんに向けることはできないであろう。幸福に至る道は、全くのバラバラで何でもよいというものではない。生活に余裕があり、社会的交流に恵まれ、人生の意義や信念に支えられるという、一定の方向に向き、個人の人生にいくらかの安定があることが人の幸福にとっての必要条件と思われる。カラオケ喫茶のママも同じであることを確認した。まさに、「私の幸せは此処に」である。

研究発表
第 5 会場　情報社会学部 240 教室
第 1 部 13:50-15:20　司会：北林利治（京都橘大学教授）

大学授業における英語プレゼンテーション
―探究的実践の試み―
松家鮎美（岐阜薬科大学准教授）

大学生の中には、文法や語彙など英語に関する一定の知識がありながらも、英語を話すことに不安を感じる声が多い。また、それが複数の人の前で行う英語プレゼンテーションであれば、更に不安の声は高まる。本研究の調査でも、対象学生の内 9 割が、英語でプレゼンを作成・発表することに不安を抱いていた。そこで、本研究では、学生が以下 4 つの取り組みを行えるよう配慮した上で授業を行い、プレゼン準備を行った。①英語で話すことの成功体験を積む、②友人が英語で話す姿を見る、③友人と励まし合う、④プレッシャーのない環境で授業を受ける、である。その結果、②友人が英語で話す姿を見ることが、学生の不安を最も軽減させることが分かった。またプレゼン実践後には、8 割の学生が、自分の思うようにプレゼンを作成・発表することができたと答え、授業を通じて、学生のプレゼンに対する不安を軽減させることに繋がった。

＜背景＞

大学生にとって、自分の意見を英語で発信することは、周りと協働することに繋がる。そのため、プレゼンテーション力を養うことは重要だと言えるが、多くの学生は人前で英語を話すことに不安を抱いている。そこで、本研究では、学生の不安を軽減させることを目的とし、探究的な実践の枠組みでグループによるプレゼンテーションを行うこととする。

＜目的＞

本研究では、英語でプレゼンを行うことについて、授業内のどういった取り組みが、プレゼンに対する不安を軽減させるか調査を行う。

＜方法＞

英会話の授業を受講する 1 年生 48 名を対象に、プレゼンの実践を行う。プレゼンに対する不安を軽減させる取り組みとして次の 4 つを挙げ、どの方法が最も不安を軽減させるか紙面調査する。①英語で話すことの成功体験を積む、②友人が英語で話す姿を見る、③友人と励まし合う、④プレッシャーのない環境で授業を受ける

＜結果と考察＞

プレゼンを行うに当たり、上記 4 点に焦点を当てて授業を実践したところ、②友人が英語で話す姿を見ることが学生の不安を最も軽減することが分かった。また、学期末には、8 割の学生が、自分の思うようにプレゼンを実践することができたと答え、実践を通じて、学生の不安を軽減させることに繋がった。今後、継続した実践を行い、英語で話すことに対する不安を和らげるだけでなく、プレゼンに挑戦したいという動機づけになるよう取り組みを強化する必要がある。

研究発表
第 5 会場　情報社会学部 240 教室
第 1 部 13:50-15:20　司会：北林利治（京都橘大学教授）

日本人中級英語学習者の学習者言語に関する一考察
―二重主語文に関する和文英訳テストを資料として―
橋尾晋平（名古屋外国語大学専任講師）

日英語の文構造の違いにより、日本人英語学習者の文産出が困難になる場合がしばしばある。日本語に存在するが、英語に存在しない構文の一つに、二重主語文「X は Y が Z」が挙げられ、発表者の過去の研究では、主に初級レベルの学習者が二重主語文を英語で表現するのは難しいと報告した。二重主語文では、X と Y や Z の間に修飾関係があり、その関係に応じて、さまざまな種類の構文が存在しているが、拙稿（2022）は、X と Z の間に修飾関係がある場合、すなわち修飾関係にある 2 語が隣接していない場合、日本人初級英語学習者がそのような修飾関係に気づきづらく、そのタイプの二重主語文を英語で表現することは困難であると指摘した。また、拙稿（2022）は、「辞書は白水社がいい」の「白水社」と「辞書」ような修飾語・被修飾語の語順が日本語と異なる文も英語で表しづらいが、その中で、「辞書は新しいのがいい」のように、Y に代用形式「の」が後続する場合のみ、学生は「辞書」と「新しい」の間の修飾関係を把握し、そのような二重主語文を正しい英語で表現することができると報告している。

発表者の過去の研究では、日本人初級英語学習者の文産出において、しばしば二重主語文「X は Y が Z」が英語における“A is B.”に転移（transfer）してしまうと指摘しているが、英語教育や応用言語学の先行研究によると、学習者の転移は、習熟度が上がるにつれて減少するという意見がある一方で、上記のような過剰般化（overgeneralization）は習熟度が上がっても起きやすいという見解もある。したがって、本発表では、日本人中級英語学習者の学習者言語に焦点をあて、彼らの文産出に対して、二重主語文のどのような性質が影響を与えうるのかの解明を図る。

本発表では、日本人中級英語学習者の大学生を対象とした和文英訳のテスト調査を実施する。調査協力者の学生を 2 つのグループに分け、同一の英語で表現されると想定している二重主語をもつ文ともたない文を用意し、一方のグループには、「うさぎの耳が長い」のような二重主語をもたない文を与え、もう一方のグループには、「うさぎは耳が長い」のような二重主語をもつ文を与え、それぞれのグループの学生が与えられた文の英訳を課し、二重主語文のタイプに応じて、二重主語の有無と英訳の正確性の間に差が見られるかどうかを分析する。また、拙稿（2022）のデータとも比較を行い、習熟度が上がることで英語での表現が容易になるタイプと習熟度が上がっても英語での表現が困難なままであるタイプの二重主語文は何かを明らかにしていき、また、日本人初級・中級学習者の文産出の指導法はどのようになされるべきかについても検討していく。

研究発表
第 5 会場　情報社会学部 240 教室
第 1 部 13:50–15:20　司会：北林利治（京都橘大学教授）

アニメに出現する命令・依頼表現に対する英語・フランス語翻訳

松井夏津紀（京都先端科学大学准教授）

本発表では、命令や強い依頼の場面が多いアニメ『進撃の巨人』を用いて、話し手が聞き手に日本語で命令や命令に準じる強い依頼を伝達する際、英語とフランス語でどのような翻訳がされるのかを調査する。アニメに出現する対象となる表現を、英語、及びフランス語の字幕翻訳と音声吹き替え翻訳と比較し、命令や強い依頼を伝達する日本語の表現が、英語とフランス語に翻訳される際に重視される点を考察する。

聞き手に何らかの行為をさせる要請をするための発話は、他者に邪魔をされたくないという聞き手の「ネガティブ・フェイス」を脅かす行為（Face Threatening Act（以下 FTA））となるため、話し手は FTA を軽減するために、自分の要求が最も円滑に通りやすい「ポライトネス・ストラテジー」を選択し、依頼や指示を行う（Brown & Levinson, 1987）。しかし、切羽詰まった状況での命令や緊急時などにおける強い依頼をする場合、FTA を軽減せずに、より明確に意図を伝達する命令文やそれに準じる表現が使用されることが多い。

日本語では、「勉強しろ」のような命令形をはじめ、指示で使われる「勉強すること」や「勉強するように」、また「勉強！」のような名詞止め用法も命令に用いられる。また、話し手の語気によっては、「勉強して」のような「テ形」を用いた依頼文が命令の意味合いを持つこともある。日本語では命令表現と同様に、「よそ見するな」、「よそ見してはいけない」、「よそ見しないように」、「よそ見しないこと」というような禁止表現においても、様々なバリエーションが見られる。一方、英語やフランス語でも、命令形を用いた命令文だけではなく、“Will you”や“Voulez-vous”などの依頼表現を用いて、命令の意味合いが出されることもある。しかし、日本語には上記の例以外に、授受表現を用いた命令表現も存在するため、命令や命令に準じる強い依頼をするときの表現は、英語やフランス語のバリエーションよりも多種多様であると言える。

本発表では、アニメ『進撃の巨人』をデータベースとし、命令や命令に準じる強い依頼を伝達する表現を取り上げ、それらに対応する英語とフランス語の字幕翻訳文、及び吹き替え翻訳文では、どのような構文が対訳として用いられているのかを分類する。日本語のセリフを抽出する際、FTA の軽減という点も視野に入れ、様々な命令や依頼の表現が、どのような場面で使用されているのかを分析する。構文タイプという言語情報に加え、話し手の発話様態（音声情報）、また、発話時の状況や話し手の心的態度のような非言語情報も、翻訳の際の構文選択の要因となると考えられるので、音声情報や非言語情報も踏まえた考察を行う。その結果、英語やフランス語の命令形を用いた命令文、及び英語の“have to ~ /got to ~ /need to ~”構文やフランス語の“devoir ~ / Il faut ~”構文などが、どのように効果的に日本語の命令文や命令に準じる強い依頼文の対訳として用いられているかを明らかにする。

研究発表
第 5 会場　情報社会学部メディア棟 240 教室
第 2 部 15:30–17:00　司会：澤田敬人（静岡県立大学教授）　※オンライン発表

「韓劇」および「韓流ドラマ」
―テレビドラマ領域における日中での初期の韓流受容概念の比較研究―

石俊彦（東北大学大学院博士後期課程）

本発表の目的は、主に韓流現象のもとでの日中両国における韓国テレビドラマの受容に着目し、2000 年前後の両国の韓流の始まりを振り返り、日中で生まれた「韓劇」や「韓流ドラマ」などの概念を考察し、初期の韓流受容中でのテレビドラマ領域における「韓流」というものを明らかにすることである。

韓流と言えば、近年『愛の不時着』や『イカゲーム』などの韓流ドラマ及び BTS や New Jeans などの k-pop アイドルのヒットにより、世界各地で起こった流行現象として注目されている。元々21 世紀に東アジアでの韓国大衆文化の流行という文化現象として始まった韓流は、約 20 年を経て、現在世界的な文化現象に発展してきた。とりわけ、韓流ドラマはこの韓流の重要な領域の一つで、2000 年頃から韓流をリードしてきて、今まで世界中の韓流の拡張を支えている。2000 年代に韓流現象が初めて発生したのは主に韓国ドラマの盛り上がりからであった。1997 年『愛が何だって』が中国で大ヒットして、それを契機に、「韓流」という現象が初めて出現した。それに続いて、『秋の童話』や『風呂場の男達』などの作品が熱い人気を維持して、中華圏では韓国ドラマを指す「韓劇」という新語が日常化した。また、2003 年『冬のソナタ』が日本で「第一次韓流ブーム」を引き起こし、それをはじめ、『天国の階段』や『パリの恋人』などが中高年女性の中で流行し、「韓流ドラマ」として受容された。

2000 年前後の韓国ドラマの盛り上がりは韓流受容の主流であり、韓流に対する認識も各地域で受容された韓国ドラマによって構築された。現在韓流は一つの文化現象として認識され、今まで董[1]や鄭[2]、小倉[3]などの研究者も各地域で共通する韓流現象の存在をそれぞれ説明したが、韓流は越境するメディア文化の一例として、受容側によって定義されるという特徴が存在する。各地域の視聴者に受容された韓国ドラマには独自の特徴が存在して、「韓劇」や「韓流ドラマ」などそれぞれのアイデンティティにも差異が存在すると考えられる。それらを踏まえて、本発表は同じように韓国ドラマの盛り上がりから韓流が発足した日中両国の受容状況を取り上げ、『愛が何だって』や『冬のソナタ』など 2000 年代前後に両国で受容された韓国ドラマ作品を利用して、「韓劇」および「韓流ドラマ」という韓流のもとでの概念に着目し、アイデンティティの形成や異同を考察した上で、初期の韓流受容中でのテレビドラマ領域における「韓流」という存在を比較しながら検討してみたい。

---

[1] 董暘（編）（2008）『韓劇攻略：当代韓国電視劇研究』中国伝媒大学出版社

[2] 鄭榮蘭（2017）『日韓文化交流の現代史：グローバル化時代の文化政策：韓流と日流』早稲田大学出版部

[3] 小倉紀蔵・小針進（編）（2007）『韓流ハンドブック』新書館

研究発表
第 5 会場　情報社会学部メディア棟 240 教室
第 2 部 15:30-17:00　司会：澤田敬人（静岡県立大学教授）　※オンライン発表

なぜ中国においてコミュニティ単位の災害対応が期待しにくいのか

龐朝霞（奈良女子大学大学院博士後期課程）

自然災害の頻発が続く中、人的・物的損失を最小限に抑えるための対策がますます重要とされている。この背景において、災害が発生した際には、災害情報の共有や緊急救援時の協力が含まれる近隣住民との連携が有効であるとされている。

日本では、阪神・淡路大震災（1995）と東日本大震災（2011）の発生を契機に、災害法制の整備や防災計画の策定などが進んでおり、災害発生直後に人命救助において高く評価されている住民同士の相互扶助も制度化されている。例えば、2013 年の災害対策基本法では、共助に関する規定が追加された。その際、地域コミュニティにおける共助による防災活動の推進の観点から、市町村内の一定の地区の居住者及び事業（地区居住者等）が行う自発的な防災活動に関する「地区防災計画制度」が新たに創設された（2014 年 4 月 1 日施行）。こうした取り組みにより、想定外の大規模な災害が発生する場合、行政の対応限界を補足することができるほか、日頃から地域の防災訓練への参加などにより、迅速に災害避難弱者の情報を把握して対応できるようになっている。

一方で、同様に災害が頻発する中国では、四川大震災（2008）発生以降、住民の生活単位であるコミュニティ（中国語では「社区」と呼ばれる）を主体とした災害教育活動や避難訓練の実施が行われているが、その効果は期待されるほど進展していない状況である。

住民の自発参加意欲が低いことや、社区の防災減災活動に用いる予算が不十分であると指摘されている。中国では、コミュニティ単位での「共助」があまり機能していないという実態が浮かび上がっている。

今回の発表では、コミュニティの災害法制における位置づけと、行政がコミュニティ自体に対する規定を文献分析し、実際の質問紙調査でコミュニティ防災に対する主観的な認識を組み合わせ、「なぜ中国においてなぜコミュニティ単位の災害対応が期待しにくいのか」を明らかにしたいと考えている。その結果を踏まえ、日本におけるコミュニティ防災の相違について検討を試みる。

研究発表
第 5 会場　情報社会学部メディア棟 240 教室
第 2 部 15:30-17:00　司会：澤田敬人（静岡県立大学教授）　※オンライン発表

Theravada Buddhist Ethics in Sri Lankan Karate Practitioners' Life and Practice

Petra Maveekumbura Karlova
(Assistant Professor（助教）, Palacky University Olomouc)

There are many studies on the relation between Oriental martial arts and Mahayana Buddhism starting from Nitobe's famous book *Bushido* (1908). Benesh and others presented argument against the existence of connection between martial arts and Zen Buddhism. However, relation between martial arts and Therevada Buddhism has not been discussed yet although there is numerous karate population in Sri Lanka where Theravada Buddhism is prevailing. Therefore, this research aims to shed light on how Theravada Buddhism penetrates karate life and practice of Sri Lankan Karate practitioners, and it will focus on ethics (*sila*). Ethics in Japanese karate is usually connected with Confucianism. But, in case of Sri Lanka, Theravada Buddhist ethics is more relevant. Keeping morality is the second most important virtue in Theravada Buddhism following the generosity (*dana*) and it is formed mainly by precepts. The foundations of *sila* are Five Precepts (*pan sil*) that are followed every day, and Eight Precepts (*ata sil*) that are followed once a month on *poya* days. In this research, I conducted semi-structured interviews to Sri Lankan Buddhist karate instructors in which I asked them if they chant *pan sil* or *ata sil*, follow them and teach them to their karate students.

比較文化論　No.42

発行：日本比較文化学会
発行日：2024 年 5 月 17 日

本部事務局：
803-0835　北九州市小倉北区井堀 1-3-5 西南女学院大学

日本比較文化学会第 42 回全国大会・2024 年度国際学術大会準備実行委員会実行委員会：
464-8662　名古屋市千種区星が丘元町 17-3　椙山女学園大学
樋口謙一郎研究室内
Email:higuchi@sugiyama-u.ac.jp

印刷：